令和４年度第２回米子市総合教育会議　概要

■日時
令和５年２月１６日（木）午前１０時から１１時３２分

■場所
米子市役所本庁舎４階　４０２会議室

■議事
（１）学力向上について
（２）部活動の地域移行について
（３）不登校対策の取組状況について

■出席者
市長　伊木 隆司
教育長　浦林 実
教育委員　白井 靖二
教育委員　上森 英史
教育委員　荒川 陽子
教育委員　三瓶 文乃

■出席職員
総合政策部総合政策課長　堀口　修治
総合政策部総合政策課総合戦略室長　遠藤　義英
教育委員会事務局長兼こども政策課長　松田　展雄
こども政策課担当課長補佐　木村　俊文
こども施設課長　斎木 雅徳
こども支援課長　金川　和弘
学校教育課長　西村 健吾
学校教育課課長補佐　仲倉　昭雄
学校教育課担当課長補佐　平野　勝久
学校教育課担当課長補佐　畑野　良幸
生涯学習課長　毛利　公一
学校給食課長　伊藤　康恵

■傍聴者数
３人

■市長あいさつ

《伊木市長》

教育委員の皆様には、日頃から様々な貴重なご意見を賜わっており、感謝申しあげる。

本日の議題は、いずれも米子市の児童生徒の健全育成にかかる重要なテーマ。

皆さまにご議論いただき、本市の教育の振興、一層の充実を皆さまと一緒に成し遂げたい。

■教育長あいさつ

《浦林教育長》

総合教育会議では、市長と委員の皆様から毎回貴重な議論をいただき、市長には力強く後押しいただいている。

コミュニティ・スクールは、４中学校区でスタートしており、各校区で特色ある取組を行い、地域とともにある学校に近づいている。

GIGA スクールについては、こども も教員も慣れるため端末をできるだけ使うようにしている。今後はより有効的な活用が求められ、研修等を重ねさらなる充実を図っていく。

端末の家庭への持ち帰りは、１０校程度で試行し課題を洗い出している。日常的な持ち帰りができるよう課題を解決していきたい。

皆さまと本市の教育課題や、今後の方向性を議論して次の教育行政に活かしたい。

■議事（１）学力向上について

《事務局》

資料に沿って説明。

《伊木市長》

以前は、学力学習状況の結果が全国平均に劣ることが散見されたが、近年は、ずいぶん改善した。

学力向上に向けた取組は、比較的順調に成果を出している。

《上森委員》

途切れのない一貫した教育を始めてから学力は少しずつ向上しているが、2 極化が進んでおり、どう改善していくのか。インクルーシブ教育も課題として教育振興基本計画に挙げられており、関連して対応する必要がある。

また、安心安全な環境で教育をしていくため、学校のハード環境の整備を急いでほしい。

《西村学校教育課長》

様々な個性や学力を持つこども一人一人の状況に合わせた適切な支援や指導が２極化の解消やイン

クルーシブ教育の適合につながると考えている。

《伊木市長》
　本市の学校の大半は、昭和４０年代、５０年代に建てられたもので、一斉に老朽化が始まっている。
　予算規模を現状と変えずに成果を出すには大規模改修一辺倒では無理。必要な改修を行いながら中規模小規模改修を織り交ぜながら実施する方向で検討している。

《荒川委員》
　低学年での学力の定着が課題。積み重ねが大事で、学校の学びとともに家庭学習の定着を推し進めてほしい。
　情報モラル教育は、チャット GPT という新たなツールが出てきて便利だが、教育の視点では難しい問題も含んでいる。こういった時代に即したものにスピード感を持って対応いただきたいし、掘り下げた情報モラル教育も引き続きお願いしたい。

《伊木市長》
　GIGA スクールについては、家庭学習にも活かせるような形を模索している状況と伺っている。こどもたちがそういったものを、それぞれ使いながら自分で伸びていくことを期待している。

《西村学校教育課長》
　情報モラルについては、教育委員会も学校も危機意識を持って当たっている。日進月歩で、こどもたちの方が早い部分もあるが、アンテナを高くして、スピード感を持って対応していきたい。

《白井委員》
　６年生の学力調査の結果、「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」が、県平均よりも良い結果。基礎となる知識や技能を発達段階で身につける必要がある。それぞれの発達段階において基礎的なものが身につくよう、引き続き頑張っていただきたい。
　ICT の活用は、アナログの手法が良いと思う場面でも使われることがある。どういう場面で使うのが良いか TPO を研ぎ澄ませていく、皆が情報共有して良い具合に活用していくことが重要。

《伊木市長》
　基礎的な知識をいかに持つかは、こういう時代だからこそ、より一層必要性がクローズアップされてもいい。

《三瓶委員》
　低学年の知識の定着は必要。早いうちに苦手意識を持つこどもが多い。低学年のうちに興味が持てるもの、わくわく感がある授業をお願いしたい。「目当て、まとめ、振り返り」により、先生方の質は向上しており、より興味がわく目当ての提示や、先生方のスキルのさらなるブラッシュアップをしてほしい。
　国語であまり作文を書かないと伺っている。私が小さい頃は、作文をたくさん書いた。作文は、想像して、

言葉にして正しく書くという力がつきやすい。ぜひ取り入れてほしい。
　３０名前後の児童生徒には困り感のある生徒もいて、ペースが違うこどもを一度に教えることは大変。少人数学級をより手厚くしたり、補助の先生を入れるなどは有効な手段。そのような対応ができるよう、さらなる工夫をお願いしたい。

《伊木市長》
　低学年のうちに落ちこぼれないというのは先々の教育のためにも重要なポイント。１年生アドバイザーを設けているが、低学年アドバイザー等の配置が必要であれば、ご意見を伺いながら考えたい。

《浦林教育長》
　小学校の間に基礎的な学力を身につけることは絶対に必要。主体的な学習と呼んでいるが、「目当て、まとめ、振り返り」これが必要で、こどもたちに両方の力を付けさせたい。
　学力学習状況調査については、悪かったところは受け止め、改善方法を考え、「目当て、まとめ、振り返り」を行い、主体的な学習、受け身じゃない学習につなげている。
　本市は、どの教科でも「目当て、まとめ、振り返り」という同じスタイルで学習する形としている。これが米子市の教育の原動力になっている。
　学力向上を校長が学校経営の視点で考えている。私と課長で校長の相談に乗り、アドバイス等の意見交換を行うことで、劇的な結果が出ている学校もある。
　学力の２極化は、できていない子がたくさんいることが問題。こどもの学習がよくわかるための教師の支援、言葉かけを磨くために、初任者研修、中堅教員研修等で私自身が伝えている。
　特別支援教育の視点をとり入れて来年度の授業改善の看板にしたい。特別支援教育は、特別支援学級のこどもたちへの対応だと勘違いされるが、全てのこどもに必要な支援。ゼロベースで全ての教室で実現できるようにしていく。
　これまでケアが足りず学習が身についていないこどもたちに支援が届けば、２極化の解消に向かう。
　書く力については、学力学習状況調査でも、記述的な問題ができない学級や学年がある。西部教育局と連携し、単に作文ではなく、要約とか、５０字以内にまとめるとか、目的を絞って書かせることに力点を置いて授業を行っている。

《伊木市長》
　今日、いただいた意見について事務局でしっかりまとめ、今後の教育政策にできるだけ反映できるように我々市長部局も努力をしていきたい。

■議事（２）部活動の地域移行について

《事務局》
　資料に沿って説明。

《伊木市長》

部活動の地域移行は、国は当初、３年以内という話だったが、期限がなくなり曖昧になった。

特に中学校の部活動は、集団スポーツを中心に、少子化の影響もあり、上手く回らない状況が既に発生している。また、３年間という年月では、こどもたちが卒業してしまう。

既に在籍しているこどもたちのためにも、本市は、できるだけ早く、整ったところから不完全ながらスタートを切るのが良いと思う。必要な予算等については、市長部局でしっかり対応させていただくこととして進めている。

《白井委員》

少子化で中学校の規模も小さく、特に団体で行う部活動ができないことが起きている。学校やこどもたちが困る一方で、各競技団体も危機感をもっておられると思う。各団体等に対し、逆にチャンスとしてアプローチする工夫を知恵を絞ってやってほしい。

こどもたちがスポーツや芸術活動に対し継続的に親しむ機会を確保する目的があるので、家庭の経済状況に左右されない活動ができるよう支援をお願いしたい。

《伊木市長》

サッカーや野球などの人数が多い競技で人数が集まらないという傾向もある。

競技人口は少ないものの日本人が世界で活躍しているボクシングやスケートボードなどは、指導者が少人数であり、生徒たちのアクセスが大きな課題だが、部活動地域移行の仕組みに落とし込んで解決できるよう検討していただきたい。

《仲倉学校教育課課長補佐》

スポーツ団体等の方々に対し、学校側からお願いしたいこと、競技団体さんが思っておられることを、十分にやりとりして意見交換しながら良い形で進めていきたい。

《荒川委員》

地域移行に関して、こどもたちが休日と平日が違うことで戸惑わないという大前提で話が進んでいると思っている。

地域に今まで無かったものも進めていこうという話はチャンス。中海の活用や大山でのウインタースポーツ等、地域色を活かした活動が、運動部に限らず、茶道や、地域の特産に携わるなど、既に学校の授業で地域課題の探求が始まっており、それを深める時間が持てる。

各地域に公民館があり、公民館を拠点とすれば、行き来も容易。ぜひ、地域の特性を活かした活動を考えていただけたら嬉しい。

周知が課題だと感じている。保護者やこどもたちへの周知が少ない。しっかり周知していただきたい。

教育的意義を継承されるということだが、その教育的意義について伺いたい。

《伊木市長》

ウインタースポーツや茶道というお話があったが、やはりチャンスととらえて話を進めていきたい。

《仲倉学校教育課課長補佐》

周知については、段階的に進めていきたい。教育的意義について、部活動はこれまで教員が中心になり、技術の向上のみならず、異学年での活動、今後の自分の生き方を育んでいく等、あらゆる面で教育的意義があった。

今後、指導者を広げていくが、これまで学校の教員が思いを持って担ってきたことを研修会等で周知しながら、指導者の育成を図っていきたい。

《荒川委員》

こどもたちが健やかに成長できる部活動であってほしい。教育的意義については、団体等に対し、丁寧に説明会等を重ね、現場でもきちんと点検していただきたいので、点検制度・方法を考えていただきたい。

《伊木市長》

教育的意義について国も謳っている。我々も大切にして取り組んでいきたい。

《三瓶委員》

部活動の教育的意義は、とても大切。こどもたちは様々な経験をして心と体が成長する。学校以外のコミュニティにこどもたちが参加することは素晴らしいこと。

自主的な多様な学びの場とするならば、休日の部活動は、希望制でもいいのでは。

ある程度の選択肢をこどもたちに与えることが、こどもたちの多様性を重んじるのでは。

《伊木市長》

部活動の希望制について、現在、部活動は強制参加だが、事実上、幽霊部員という言い方がある。出てこない生徒に対し、多様性、いろんな楽しみ方があるという周知の仕方が重要であるし、将来的に部活動の地域移行が、出てこない生徒の部活動参加の契機となるよう我々も努力したい。

《仲倉学校教育課課長補佐》

自主的なクラブへの参加なのか部活動なのかは、もう少し時間をかけないと定まらないが、多様性ということもしっかり念頭におきながら、今後の部活動の地域移行の推進に向け、あらゆる方々と協議を図っていく。

《上森委員》

一般の市民は、部活動を教育課程の一部だと思っている。そこをしっかりおさえないと迷走する。

部活動の在り方、教員の負担軽減、少子化があって、部活動の地域移行という考え方だと認識しているが、改めて考え方をお伺いしたい。

また、各スポーツ団体等は、ボランティアではないと認識している。県の予算は調査費ぐらいしか予算計上していなかったが、その点を各団体は気にされている。指導者は在職中、退職された方等様々だが、予算

的なことを市長さんにはお願いしたい。

《仲倉学校教育課課長補佐》

学習指導要領では、部活動は、教育課程外ではあるが、こどもたちにとって大変教育的意義のあるものとされている。これまでの部活動は、教員のボランティアという部分が強い。

部活動を負担に感じる職員がいたが、部活動をやりたいから教員を目指した職員もいる。希望する職員が引き続き指導できる体制を整えていくが、教員だけでは成り立たないので、指導員としていろんな方々に携わっていただきたい。

部活動の理念について、指導員への研修会等を重ね、しっかり理解いただいた上で指導に当たっていただきたい。改革推進期間の３年間で指導員を育成し増やしていきたい。

《伊木市長》

予算面、特に指導者の報酬について、国の部活動地域移行の議論が停滞した理由の一つだと思っている。そもそも指導者が集まりにくい。また、集めた指導者への報酬について財政負担になるという意見が全国の自治体から殺到した。本市も要望を出しているが、国の予算確保が十分ではない。

前回の総合教育会議で議論したとき、部活動の在り方として、教育的意義を継承しながら進めるという話があり私も腹が固まった。教育であれば公でしっかり負担すべきものは負担しなければならない。

これは学力向上と同じぐらい重要。社会に出た時に勉強以外の文化的あるいはスポーツ的経験は必ず活きる。

私は中学校の時に野球部だった。かなり走らされたが、それが体力増強につながったし、社会の理不尽さを覚えた。非常に教育的意義が大きかった。

予算も、いずれは国の手当ても出てくると思うが、その間のつなぎは個別自治体としてしっかり頑張りたい。

《上森委員》

今までの部活動の教育的意義は本当に大きかった。教育的な意義も含め市民やメディアに懇切丁寧な、きめ細かい説明を行ってほしい。そうすることによって次の段階がスムーズに進む。

《浦林教育長》

先日、スポーツ協会の理事会に出席したが、複数の方から部活動の地域移行について聞かれ、関心の高さを実感した。地域移行をどう進めるのかに前のめりになってしまうが、そもそもの話をしないと誤解が生じる。団体に対し、上手に伝える場を繰り返し設けていかなければならないと感じた。

また、教育委員会が勝手にルールを決めて進めるのではと心配をされたが、そんなことはできないし、しっかり意見を聞かせていただく。丁寧に意見を伺い、県や関係部署等に確認したり、整理しないといけないこともある。意見交換は相当な回数行わないといけないと思っている。

各団体もそれぞれ立ち位置や考え方が違う。それぞれの思いが一致しなければ、こどもたちは幸せになれないので、しっかりやっていく。

指導者について、教育的な観点の部分、保護者との関係性もある。こどもたちへの接し方の研修を定期

的に行うなど、指導者の確保もだが、指導者の質を上げることも課題。
　地域色や希望制についても念頭におきながらどれだけできるのか考えていきたい。
　来年度からやろうと進めているが、その先、米子市の全ての部活動の地域移行に当たるときに、今の体制では調整が難しい。これから進めていく中で何が必要か見えてくるので、全体像をどう見ていくかにつながる一年にしたい。

《伊木市長》
　冒頭に、部活動の地域移行について事務局から説明があった。まだまだ不十分ながらも、この考え方で事務を進めていきたい。

■議事（３）不登校対策の取組現状について

《事務局》
　資料に沿って説明。

《伊木市長》
　昨年度あたりから不登校対策について、人的な体制を整え、また、ぷらっとホームのようなハード整備をしながら充実させてきた。一定の成果が出始めている。こうした成果を基に、次はどういうものが必要なのか、皆さんの話を聞いて、来年度以降の施策に活かしたい。
　ぷらっとホームの運営もノウハウがたまっている。手探りの部分が多々あったと思うが、一定の成果が出ていることで横展開が考えられる。ぷらっとホームにおいて、今、蓄積している知見は、これからの教育行政に大変重要だと感じている。

《荒川委員》
　教員ではできないことがスクールソーシャルワーカーによりできていると伺うと安心する。
　ぷらっとホームへの通所者も増え、また、こどもたちが多様な体験をされていることは嬉しい。引き続き体験学習も学習支援と同時進行していただきたいし、地域の力も積極的に取り入れていただいきたい。
　一方で利用者、通所者が増え、スタッフ側の多忙感が心配。行政としてバックアップしていただきたいと強く思う。彼らの大切な居場所なので大切に考えていただきたい。
　新たな不登校が生じない体制づくりが重要。楽しく学校に通っていただきたい。
　学校は、友達がいるだけで楽しかったり、遊具があって遊んだ思い出がたくさんある。
　風通しの良い学校、間違えても平気な学級づくりや先生方の一言一言の声掛けは、こどもの心に響くので、言葉も大切にして教育理念そのものの楽しい学校づくりをさらに推し進めていただきたい。

《伊木市長》
　多くの体験が上手くいっているのであれば、学校でも体験を取り込むことで楽しい学校を作るため、逆に知見を取り入れられる面もあると思う。ぜひ活かしていただきたい。

《三瓶委員》

スクールソーシャルワーカーの増員により救われるこどもたち、ご家族が増えた。ぷらっとホームによって、行き場所を見失ったこどもたちに安心できる居場所が提供され、校内サポート教室によって、本来いるべき場所にいられるこどもたちが増え、嬉しく思う。

不登校のこどもたちは、他人とのコミュニケーションを苦手としているか、あきらめている。社会で自立するには、コミュニケーションが必要不可欠。コミュニケーションの訓練、練習ができる対応をお願いしたい。人と触れ合うことは楽しいと感じられる支援体制を作っていただきたい。

予防策が課題だが、校内サポート教室が全校にあると良い。

こどもたちは、誰かに認められたい気持ちを持っている。逃げる場所が確保され、常駐されている方がいる安心感、話を聞いてもらえ、認めてもらえる人がいることは、コミュニケーションを取り続ける勇気のもと。

《上森委員》

不登校は、ここ数年、増加傾向にある。減少している学校もあるので良い対策ができている学校の指導方法について教えていただきたい。

ぷらっとホームに通所者が増え、また、４名が学校に復帰したことが成果の一つとされ、来年度の横展開もあると思うが、通所するこどもたちを学校に復帰させることが第一義だと考える。

《西村学校教育課長》

不登校の状況について、不登校児童・生徒数は令和３年度が２２４名、令和４年度は１２月末現在で約２４０名と増加傾向にある。

背景は様々なものが複雑に重なり合っているが、この２，３年はコロナの影響もあると分析している。コロナが明けて、今まで溜めていたエネルギーを体験で発散し、活動や学習に向かえる教育活動を進めてまいりたい。

好事例を基に、こうしたらこどもたちが良くなった、改善した、そういうことを分析して横展開していきたい。

すべてのこどもの成長する場へのアクセス１００％をめざしており、今まで引きこもっていたこどもが、ぷらっとホームに来られたのは一つの成果ととらえている。

ただ、学校に復帰させることは、学校教育を進めたい者として、第一義として考えている。チャンスがあれば、学校に復帰させる取組を進めてまいりたいし、復帰できないこどもたちにも精一杯支援していく体制づくりを進めたい。

《白井委員》

不登校は、こどもたち一人一人に違う対応が必要で、結果は一つではない。ぷらっとホームやスクールソーシャルワーカーなど、米子市が力を入れていることで良い成果がでているのは良いことで心強い。

そうした場や人が増えれば増えるほど、お互いがお互いに任せるのではなく、こどもたちのプラスでもマイナスでも、小さな変化をお互いがフィードバックして情報共有することにより、家庭も保護者も学校もこどもたちへの対応が、よりよい方向に変化、対応できると思う。

《浦林教育長》

大幅な体制強化をしていただき、いろいろなことが良い方に動き出した。

体制強化されたときに、校長に、少なくとも不登校のこども全員に、これまで以上のアプローチをするようにと話した。人手が厚いということは、こどもたちのチャンスも広げなければならないということ。

体制強化によって良くなるというのは当たり前で、それ以上にならないといけない。例えば、新たな不登校に繋げないことだが、わかりやすい学習を作っていくことが学校が楽しくなる一つの要因。

学校がこどもたちの力で運営されていく、支えあう仲間づくり、学級づくりができていれば不登校のこどもも出てこない。

それらを両立できるのは教員一人一人の力。体制強化によって、学校側もそういうことができるようになったり、あるいは不登校のこどもが早期に戻ってくる、そういった展開に繋げていきたい。

こどもたちが小学生、中学生の間に自分なりの学びの場を持って日々成長していける、そういった米子市のこどもにしないといけない。

《伊木市長》

委員の皆さまから様々な貴重な意見をいただいたので、それを踏まえて、来年度の政策もしっかりと充実したものにしていきたい。

それぞれ３つの議題にいただいた意見を基に、改めて私も教育行政をしっかりと支えてまいりたいと思いますし、教育委員会の皆さま、現場の先生方が頑張れる体制を目指してこれからも努力を続けてまいります。

本日の議論、ありがとうございました。